

年五百六十餘萬圓となれり其の後再び盛返し殊に大正四年以後に至りて歐洲戰亂の影響により大飛躍を爲し五年の如きは六千萬圓に上り同六年二千七百萬圓七年參千四百萬圓を示せり然れども此の狀況が日露戰爭の當時の如く果して一時的現象に止まるや否や今後の推移に俟たざるべからず

産額

年次	産額	年次	産額
明治三六	三、九二一、八四六	大正一	五、六八二、三七一
同三七	一八、八七九、三三七	同二	七、三二九、九一〇
同三八	一六、七二五、八四四	同三	九、一四三、五〇八
同三九	一〇、八八二、九八四	同四	一九、六八八、二七五
同四〇	八、九六八、九四六	同五	六〇、八一、六一六
同四一	七、一七一、七三三	同六	二七、〇九五、六二七
同四二	六、九四七、二六八	同七	三四、七一三、三七四
同四三	七、六二四、七一七	同八	二八、四四九、三八三
同四四	六、四六二、六一八	同九	二六、五二五、三〇四

(農商務統計表)

革製造の原料は主として牛皮にして水牛皮鹿皮馬皮等も用ひらる而して其の製造品は従前婦人小兒のツボン吊皮自動車用皮紐皮椅子寢臺用革等の家具用手薄物に限られしが近來は機械用調革靴底皮クローム皮等を製造し其の品質も漸次良好となり現在に於ては外國品に比し殆ど遜色なしと稱せられ原料は多く輸入皮に仰ぎ殊に牛皮水牛皮は年々輸入皮類の大部を占め居れり右の如く製革業の進歩と共に産額著しく増進せるが尙ほ未だ内地需要を充すの程度に達せずして年々數百萬圓の輸入を見つあり

第二節 輸出入の狀況

先づ輸出に於て革及革製品は大正元年迄殆ど輸出を見ず只毛皮其の他の皮が年々百萬圓内外輸出せられ居るのみ大正元年以後百萬圓内外の革及革製品を輸出するに至り大正六年以後歐洲戰亂の影響を受けて輸出殷盛となり東洋方面殊に支那に向け五

百萬圓内外を輸出せり次に輸入に於ては原料品たる皮類は年々通常二百萬圓内外多きは五百萬圓以上に上りたるが最近には多額の輸入を見其の額年々五百萬圓乃至千五百萬圓に達せり革及革製品は從來貳百萬圓乃至參百萬圓の輸入を見たりしが大正七年以後是亦激増せり皮革類の輸出入詳細は左表に示す如し

年次	輸 出		輸 入	
	毛皮其他	皮革類及革製品	牛皮水牛皮其他の類	革類及革製品
明治三六	一、〇八一、七五六		一、九〇二、九八二	六一一、三六六
同 三七	一、〇七七、四一三		五、〇八一、八三〇	二六二、〇〇〇
同 三八	九五三、三四三		二、七五、二九二	一〇、四八、三四九
同 三九	一、六四三、九六一		一、五三二、六四一	八、〇〇〇、〇〇〇
同 四〇	一、五八六、〇七一		二、四七一、八五〇	二、四二一、一八四
同 四一	一、二四二、三八六		一、五九八、六二二	三、三二八、〇五一
同 四二	一、四〇一、九九三		一、九五三、八二五	二、三二五、五五〇
同 四三	一、八三二、四九〇		一、七二六、一四五	二、一五一、四二四
同 四四	一、八一〇、二七五		九三五、二二一	一、六九七、七九二

(右ノ内靴底八、〇〇〇、〇〇〇)

大正	輸 出		輸 入	
	毛皮其他	皮革類及革製品	牛皮水牛皮其他の類	革類及革製品
一	七二九、七八八	六〇三、五四六	一、八三六、四一九	三、三九九、七九八
二	九九六、九五五	一、〇三四、一九三	二、四四〇、二六〇	二、五〇七、〇二五
三	七二三、〇三九	九三九、七九四	二、四七八、七七五	二、一〇七、九四九
四	一三八、八八六	八五〇、一四六	六、四四一、五五一	一、九九七、六四二
五	五九〇、三九九	一、九二七、一五九	八、九七一、七二八	三、〇六八、九二九
六	八〇一、三三九	五、一九一、四六三	五、八四一、四一〇	二、五四二、二五六
七	一、四〇一、五七六	五、二九七、八六二	一、八九〇、四五五	四、一九二、四四三
八	一、四三三、二四	三、二六九、二六二	一、五四六、〇二七	五、八〇四、六四八
九	一、二八五、九四九	一、九六〇、六二一	一、九三五、五八三	九、六六五、一〇五

(農商務統計表)

尙ほ原料品と革及革製品の輸入額を比較するに大正二年までは原料品は革及革製品に及ばざりしが大正三年以後は累年原料品の方多額にして數倍に上れり是れ内地製革業の最近に於ける進歩を語るものにして漸次輸入品を驅逐しつつあるなり製革業が斯く進歩せるは前記の如く主として本邦の保護政策に因るものにして明治四十四年の關稅改正によりて原料の稅率低減せられ綿羊山羊皮從價四割牛皮水牛皮無稅其の他の皮五分

となりしに反し革類は全部二割乃至三割の税を課せらるることとなれり是れ最近に於ける原料輸入の増加革類輸入の減少せる原因にして必ずしも本邦製革業の眞價を示すものに非ず

第十七章 醸造業

第一節 醸造業者数

醸造業は之を日本酒製造麥酒製造醬油味噌製造等に大別するを得べし麥酒製造業を除きたる他の醸造業は夙に本邦に行はれ古來存在する諸他事業と同様多くは個人經營にして固より小規模工業の範圍を脱せず獨り麥酒製造業は新企業なるを以て大規模の會社事業として行はる次に掲ぐる各種醸造業者の戸數に觀て各事業の情況を察するに足らむ

醸造業者戸數表

年次	日本酒	麥酒	酒及酒精含有飲料	醬油	合計
明治三六	一八、三二九	二六	三三二	一五、八一〇	三四、四九六
同 三七	一七、六六七	二二	三五二	一五、六九〇	三三、七三〇
同 三八	一七、五八六	二二	四一六	一五、四四三	三三、四六六
同 三九	一七、八四八	一三	四二二	一五、一八〇	三三、四五四
同 四〇	一七、七五三	一四	四三三	一五、〇六三	三三、二六三

明治	同	同	同	同	同	同	同	大	同	同	同	明
四	四	四	四	三	二	一	四	正	四	四	四	四
一	二	三	四	五	六	七	八	同	同	同	同	同
一七九、九九四	一七〇、一九九	一四三、〇三三	一三三、三三八	一三〇、六六二	一二八、八一	一二五、八九九	一二二、二二七	一二〇、四一四	一一七、〇七八	一一四、七七一	一一一、二二九	一〇八、二二九
一一二	一一一	一一	九	八	九	八	九	九	八	九	九	二
四一六	三九二	三二九	三〇五	三〇六	二八七	二八一	二五九	二六〇	二七〇	三三七	三九一	三九一
一四、八〇〇	一四、六七六	一四、三六四	一四、〇四七	一三、六七三	一三、四六八	一三、〇六七	一二、九四二	一二、七三二	一二、四六九	一二、二四四	一一、二八四	一一、二八四
三三、三三三	三二、〇九八	二八、九九七	二七、五八九	二七、〇四九	二六、五九五	二五、九四六	二五、四二六	二五、一〇五	二四、八二六	二四、六四二	二四、二八四	二四、七二五

三八八

(帝國統計年鑑)

右表の如く日本酒酒精及酒精含有飲料製造業の戸數竝に麥酒製造會社數は何れも皆年々減少の傾向を示せるも是は此等事業の漸次大規模に赴きつつある結果に外ならず若し會社組織方面のみを觀れば左表の如く會社數及拂込資本金共に逐年著大なる増進を示せり

醸造業會社數及資本金高

年次	酒造業		其の他の醸造業	
	會社數	拂込資本金	會社數	拂込資本金
明治二〇	二四六	七、三三三、三九三	九六	一、九四三、七九六
同	二七四	一四、三八一、三〇六	一二七	五、九七九、〇四八
大正	四二六	二四、九七〇、九〇〇	二五二	五、九一〇、五二八
同	五一二	二六、一〇七、一五三	二八四	六、六五三、八七六
同	五五九	三一、五五三、八一三	二九七	七、四一四、四九二
同	六〇九	三九、八八九、五一六	四二六	一七、四六〇、三五九
同	七二五	三七、九一〇、五一〇	五一二	四九、〇八一、二六八

(帝國統計年鑑)

右表中酒造業は日本酒を其の他の醸造業は麥酒葡萄酒等の洋酒竝に醬油味噌等の製造業を含めり而して此等會社組織として大規模の下に經營されつつあるもの社數及資本金及會社數の増加は麥酒製造業以外の他の諸業が個人經營より漸次に發達し或は合併し或は規模を大にして會社組織に移りつつあるの證左

三八九

たり只夫れ麥酒製造業に至りては始めより會社組織なるを以て其の社數の減少は偶々其の規模の膨脹を反映するものと謂ふべく次節に説明するが如く其の産額の増加と對照すれば以て其の眞狀を明かにすることを得べし

第二節 釀造物産額

前記の如く我釀造業は漸次大規模經營に移りつつあるが各釀造物の産額増進の程度は左表に示すが如し

釀造業産額

年次	日本酒	麥酒	酒精及同含有飲料	醬	油
明治三六	三、八二七、六九二	九三、三〇〇	四、〇〇四	一、七六三、七一〇	
同 三七	三、三四六、二九四	九五、〇四六	九、〇五八	一、八五九、一六五	
同 三八	四、〇〇〇、五二六	一三三、四一〇	二八、二五五	一、七六五、九七三	
同 三九	四、四〇五、八六〇	一五九、三六七	二四、六九六	一、九三二、四九二	
同 四〇	四、六三一、七七八	二〇一、二四四	二二、三二二	二、〇七四、〇〇八	
同 四一	四、四〇一、九八四	一六三、三九六	一八、八一	二、一三三、九二二	
同 四二	四、一九六、三二五	一五〇、八三一	二〇、六三九	二、一九六、九〇九	

年次	日本酒	麥酒	酒精及同含有飲料	醬	油
同 四三	四、一三八、一四七	一五五、七四一	二二、八八八	二、二〇五、五七四	
同 四四	四、五一二、七六七	一七八、六六〇	二一、五〇七	二、二九八、八八三	
大正 一	四、四六四、八九一	一九六、四〇四	二〇、一八〇	二、三五一、九九五	
同 二	四、五七九、二六一	二二一、七五三	二一、九三三	二、三九一、〇六六	
同 三	四、〇四〇、三九六	二四八、八一八	二二、一七二	二、三九八、二〇六	
同 四	四、二四三、五二九	三四五、一四二	二四、一五九	二、六〇四、六三六	
同 五	五、〇三〇、四七九	四二二、四八五	二七、九六九	二、五八六、四四七	
同 六	五、五六〇、〇五二	五一、五二五	三八、六〇九	二、六三〇、四九八	
同 七	五、四五九、二二七	六七七、二四九	三八、六〇九	二、九四〇、一三三	
同 八	六、五四五、三七五	五五〇、一七七	六四、三九八	二、七九六、二七七	

(帝國統計年鑑)

即ち日本酒釀造高は明治三十六年以降大正四年まで四百四五十萬石を往來して其の産額略一定し大正五年以後に至り五百萬石を突破し大正八年は六百五十萬石に達せりと雖も各年を通覽すれば其の生産能力に於て特に擴張したるものと云ふことを得ず而して酒精含有飲料及醬油味噌の諸業に付て見るも生産高の趨向大體日本酒と同様なるが獨り麥酒は然らず其の産額三十六

年九萬二千餘石に過ぎざりしが四十一年十六萬三千餘石となり五箇年間に實に七割五分の増産を示せり大正二年には二十二萬一千餘石を産し此の五箇年間に二割五分の増産を示し大正七年には六十七萬七千餘石を産し又此の五箇年間に約二倍餘の増加となれり以て其の發展の尋常ならざるを見るべし

第三節 輸出入高

醸造品の貿易状態を見るに日本酒及醬油は既に明治元年の頃より輸出せられしも輸出年額は略一定して増進を見ず多少の例外あるも日本酒の輸出年額は凡そ二百萬圓乃至三百萬圓の間を往來するに止り醬油も又ソースの原料として年々約八九十萬圓を輸出するに過ぎず蓋し日本酒と云ひ醬油と云ひ其の風味は邦人に適するも外人に適せず其の販路は自ら國內に局限せられざるを得ずして共に其の將來の發展を期待し難し麥酒は之と異り元來世界的飲料たるを以て輸出開始以來年々販路を開拓し近來

に至りては最大の輸出醸造品となれり日本酒麥酒及醬油の輸出高左表の如し

醸造品輸出高表

年	次	日	本	酒	麥	酒	醬	油
明治	三			八五二、四〇一		六七九、七三六		四一九、九一九
	三			二、四四四、一九六		七五五、〇二九		五五三、六七四
	三			四、九八二、三六五		一、三七七、四四七		八八二、一五二
	八			三、二二二、八九七		一、五六三、六五八		九五二、三四〇
	九			三、三八八、五八六		一、三二九、八六六		一、〇八二、八五一
	〇			三、三二九、二六二		一、二〇七、七七七		一、〇五四、四三三
	一			三、四三四、九七〇		九七二、一八二		一、〇八八、〇一〇
	二			二、七六三、三九六		九七八、九五九		一、〇〇七、三三二
	三			二、一三四、六五八		六五五、八二七		八八八、〇七九
	四			二、二二三、四四八		七三三、〇三五		八八九、〇〇三
大正	一			二、一九八、一〇七		七七八、二二〇		九九五、〇六〇
	二			二、二二二、四一三		九七九、〇〇〇		九七六、一五七
	三			一、七七五、五一五		一、四三二、五一九		九八七、一四〇
	四			一、〇三〇、三六八		二、七四八、〇九三		一、一〇〇、四二二
	五			一、一六三、六九七		四、八六九、二〇二		一、四五一、八七六
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同	三							
同	四							
同	五							
同	六							
同	七							
同	八							
同	九							
同	〇							
同	一							
同	二							
同								

大正	七	二、六七六、二八五	七、六七二、五九三	七、六六、九五三
同	八	四、五二四、八九九	七、二〇〇、〇九六	九、六八、八一九
同	九	五、一〇七、七〇一	四、五八六、八三〇	八、七七一、一九九

(農商務統計表)

即ち麥酒の輸出高は明治三十九年百五十六萬圓を示し從來の最高額なりしが其の後漸減し大正二年に至るまで各年の輸出高は百萬圓以下に止まり是れ青島に於ける獨逸麥酒會社の爲に販路を奪はれたるに加へ本邦麥酒製造業者の對外輸出に對する態度未だ十分の緊張を示さざりしに因るものなり然るに歐洲開戦の結果青島の獨逸麥酒會社倒れ且つ營業者は進で輸出に努めたる結果麥酒の輸出額著しく増加し大正四年百四十三萬圓を示し大正七年には實に七百六十七萬圓となり八年七百二十萬圓を示したるが九年は稍減少して四百五十八萬圓となれり

洋酒類の輸入せらるるものを見るに葡萄酒を最としシヤンペンウイスキー等あるも其の輸入總額は從來餘り多からず年々百

萬圓以下に止まりしが左表の如く大正六年以後大に増加の傾向あり其の内葡萄酒の輸入過半を占め大正六年七十萬圓七年百三十七萬圓なりしも九年には二百五十七萬圓に達せり

醸造品輸入額

年次	輸入總額	葡萄酒輸入額	年次	輸入總額	葡萄酒輸入額
大正五	九三五、八〇九	五八六、〇〇〇	大正八	三、四二三、六二〇	二、四一二、〇〇〇
同六	一、一八三、〇五一	七〇〇、〇〇〇	同九	三、九八一、七八二	二、五七六、九三七
同七	二、一一五、八四三	一、三七三、〇〇〇			

第四節 原料輸入の状況

更に醸造品用原料に就て一言せんに日本酒は米醬油は豆其の他の酒精は諸を原料とするを以て總て國産に依頼することを得るも麥酒はホップ及麥芽を輸入に仰ぎ又日本酒の防腐劑としてサルチル酸を輸入す其の最近の状況次の如し

るのみならず昔より農作肥料として供給せられたるものなれば其の漁獲の技幼稚なりしと雖も之によりて生計の一端に供したるは想像に難からず

降て嘉永六年本邦近海へ米國捕鯨の一遠洋漁業船の來航するや其の船體巨大にして設備完全し且つ複雑せる機械力により之を運轉する雄偉なる光景に接し本邦漁業界は異常の刺激を受けたるを疑はず斯くて明治二年開拓使新に設置せられ明治十八年始めて水産局の設置せらるるに至りて漁業の改良を促し同二十年には水産の調査試験を行ふ爲水産調査所を設け尙ほ諮問機關として水産調査會の創始を見翌年水産講習所を設置し三十年水産學校規程を發布する等種々の制度を設け官民協力斯業の發達に努力すると共に時運大に開け漸く秩序ある漁業の基礎を作るに至れり

第二節 本邦漁業の地位

輓近に於ける本邦漁船數は實に四十萬隻の多きを算し其の他發動機附汽船三千餘隻を有し大正五年に於ける漁獲高一億一千萬圓の多きに達せり然れども之を英米其他に對比すれば尙ほ遜色あるを免れず即ち大正五年に於ける日英米佛四箇國に於ける沿岸一哩の平均漁獲高を見るに左の如し

國	名	沿岸一哩の平均漁獲高	漁民一人の平均漁獲高	漁船一隻の平均漁獲高
英	國	三九、四一三	一一〇	二、四三一
米	國	七、一八〇	一八七	一、四八二
佛	國	三八、一三七	三六一	一、九四二
日	本	五、六三五	七〇	二、三三二

本邦漁業は天與の富源を有しながら尙ほ且右の狀を呈するは畢竟漁業能率の微弱なるに基因するものにして今後益漁業法を改良し遠洋漁業を奨勵すると共に天賦の富源の開發に力を致さば大なる發展を遂ぐべき餘地あるべし

第三節 漁撈

從來本邦漁船は刳舟竹筏を使用し近海出漁に止りしが漸次一枚棚二枚棚の所謂日本型漁船に進歩し稍遠海出漁となり其の後板子はテツキ張とし帆の形も横帆より縦帆となり漸く進歩せる帆船となりしが未だ生命の安固を保するに足らず頗る不安の念を以て操業せる爲に未だ目醒しき發展を見る能はざりしなり嘉永六年黒船來航してより從來の沿岸漁業に満足せず開國進取の氣溢れて遠洋漁業に著眼するに至り歐米先進國より船舶機械類其の他新式漁撈方法を輸入するのみならず政府は夙に日本型漁船改良の必要を認め率先して改良漁船を造り斯業の發達に力を致せり加之造船術の進歩により學理上復元力に依る顛覆防止密水の装置による沈没防止其の他固著法等を講究し沈没の危険を少なからしめ古來漁業を危険視するの氣習を改めたり之に因て各地漁業者就中中國九州の漁船は遠く韓海露領地方へ出漁し更に遙に南洋方面に渡航し殊に濠洲木曜島に渡り眞珠採取に従事

する本邦人逐年増加し隨て收益僅少なならず

(イ) 遠洋漁業勃興

更に明治三十年政府は遠洋漁業獎勵法を發布し遠洋漁業の發達を促し且つ西洋型漁船の使用を獎勵し之を新造するものに對して獎勵金を下附したれば西洋型漁船を建造使用するもの年々増加し茲に遠洋漁業の振興を見たり就中我國民は古來勇敢進取の氣象に富み海を愛し之に馴るるの風あるを以て本邦漁業家は夙に捕鯨業臘膾獸其の他海獸獵に著目し那威式或は米國式捕鯨法を習得し遂に房州金華山沖及朝鮮方面の捕鯨に従事するもの多きを致せり殊に日露戰後朝鮮海に於ける捕鯨業は全く我勢力範圍となり汽船捕鯨會社の設立せらるるもの夥しく捕鯨業益盛況を呈し近來に至り甚しく濫獲の傾向を示せり是に於て捕鯨汽船數は制限を受けたるに加へて潮流の變更等に基き斯業漸次衰退を來し現今閑散の狀況に在り臘膾獸獵は明治二十二年帝國水

産會社が第一第二及第三千島丸を建造し遠く北海の端に航し海
 獸獵に従事せるを以て嚆矢となす爾來漸次發達し大型汽船の建
 造せらるるもの多く明治二十九年臘虎臘獸獵法實施せられ翌
 年遠洋漁業獎勵法發布せられ頓に此の種漁業の増加を促し發達
 の機運漸く盛となりたるを以て遂に本邦當業者は嘗て米國漁業
 家の獨占に歸し利益の壟斷に委したる北海より之を驅逐し更に
 千島近海を獨占して明治四十年頃一箇年の漁高百萬圓以上に達
 せり

(□) トロール漁業の發達

網漁中著しき發達を爲せしものはトロール漁業なりとす明治
 三十年頃トロール船の始めて本邦へ輸入せられてより北海道方
 面に使用せられ其の後十年を経て技術の熟練と共に比目魚鯨等
 海底に棲息する漁類の收穫頗る多く四十二年頃より各地にトロ
 ール漁業の振興を見たり加ふるに當初政府自ら保護獎勵方針を

取り本邦漁業の實際に適應したる結果長足の進歩を告げ事業頗
 る好況を呈せしも漁船過多と且つ海底を攪亂せし爲に沿岸漁民
 の愁訴或は海底電信破損等の非難起りたるを以て政府は前記の
 方針を變更し禁止漁區を擴大し監視を嚴にするに至りし爲に是
 亦頓挫を來し戦前九州沿岸に於てトロール漁船の船籍を有する
 もの百二十隻中就業船僅に十隻餘にして他は停止又は休業の止
 なきに至れり加ふるに禁止區域の擴大に依り遠洋出漁を餘儀無
 くされ遠く臺灣及上海方面に轉するに至れる結果石炭氷の消費
 量増加し經營の困難倍加せしのみならず一般の不景氣に因る魚
 價低落等の諸原因によりて漸次トロール漁業の衰運を見るに至
 れり加之歐洲大戰以來トロール漁船は續々海外に賣却せられて
 漸次其の數を減じ大正六年には三十六隻に減じ更に大正七年に
 は僅に六隻を残すのみにてトロール漁業全く失墜するに至れり
 然れども其の後政府は本業が本邦水産業發展上に缺く可からざ

るを覺り禁止漁區の改良船體の改善等を圖り且つ船數を七十隻に制限し斯業の回復を謀るに至りたれば其の復活も亦近きにあるべし

(ハ) 石油發動機付汽船の勃興

トロール漁業の勃興と前後して本邦漁業界に始めて應用せられたるものは石油發動機附汽船なり其の當初は裝置せられたる發動機爆音の爲に魚族の逃走を危ふまれしも試用の結果非常に好成績を得て頓に此の種漁業の増加を招致し就中鯉漁には是非とも缺くべからざるものとなれり元來釣漁業は沿岸に發達したるものなるが近時濫獲の甚しきと潮流の變更とにより其の漁場漸次陸地より遠ざかるの傾向ありて小型の日本漁船にては遠洋に出漁するの危険夥しき爲に漸次衰微に傾ける際石油發動機附漁船の建造を見其の成績良好にして收穫多く且つ運搬の敏速なる等大に此の種漁船の鯉漁に有用なるを認められ漁業界に一大

福音を與へてより逐年各地に新造せられ大正四年には其の數二千三百餘隻の多きに及び殊にトロール漁船衰退の結果發動機漁船は全く之に代りて各種漁船に据附られ爾後船體の取扱至便なると引揚容易なる等により大に歓迎せられ沿岸に遠洋に普及し到る所此の種漁船の運航を見ざるなき盛況を呈するに至れり然るに歐洲大戰の結果各種事業不況の餘波を受け且つ石油の暴騰により漸次蒸汽船の發達を來し一時衰微したる蒸汽船に凌駕せられんとする状なりと雖も尙ほ大正七年の調査に據るに後の表中發動機を有するものの中に示す如く其の總船數は合計三千百九十八隻を算し次第に確實の域に達し將來蒸汽船と併立して此の種漁業の振興を見るに至るべし今統計年鑑に據り内地漁船の發達狀況を見るに左の如し

漁船累年表

年次	動力を有するもの		計
	五噸又は五十石未満	五噸以上二十噸又は五十石以上二百石未満	
大正四年末	三八〇、八四三	一一、六一六	三九三、〇七三
同五年末	三八〇、六一八	一〇、九九八	三九一、九〇一
同六年末	三七三、三五八	一〇、五六七	三八四、二四二
同七年末	三七二、一六八	九、三五七	三八一、八五四

年次	動力を有するもの		計	合計
	二百石未満又は二百石以上	二百石未満又は二百石以上		
五三	一一三	一〇〇	二、五一六	三九五、五八九
八三	四四	八一	二、八〇〇	三九四、七〇一
一六	四四	九三	二、九七七	三八七、二一九
	五一	一七九	三、二六五	三八五、一九

(備考) 右二表つづく

(統計年鑑)

(二) 漁業者の趨勢

次に漁夫に就ては往昔斯業幼稚なる時代には主として副業な

りしを以て其の人員詳なるを得ず而して明治三十三年に於て漁業家人口十四萬九千七百四十二にして大正四年には本業六十八萬四千人副業六十九萬壹千人合計百三十七萬五千人にして更に大正七年には本業六十八萬八千人副業七十一萬一千人合計實に百三十九萬九千餘人の多きを算し世界に冠たりと謂ふも可なり此の點より見るも本邦水産業が本邦産業中重要な地位を占むるを知るべく本邦が世界の三大漁場の一を以て目せらるること故なきにあらず今累年水産の漁獲高及大正三年に於ける内地人及新領土人の漁獲高を表示すれば左の如し

内地に於ける水産漁獲一覽表

年次	沿岸漁獲價額	内地近海漁獲價格	合計
明治三年	四二、四五六〇	一、九三四、四五八	四二、四四五、六〇二
同四年	四三、八九二、七八四	一、九三三、三〇〇	四三、八九二、七八四
同五年	五〇、二六一、六二九	三、二六二、三〇〇	五二、一九六、〇八七
同六年	五四、六七三、八四四	三、六四〇、二二三	五七、九三六、一四四
同七年	六二、八五七、二二二	三、六四〇、二二三	六六、四九七、四四五

明	同	同	同	同	同	同	大	同	同	同	同	同	同	同																		
治	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正																		
四	四	四	四	四	四	四	一	二	三	四	五	六	七	八																		
一	二	三	四	五	六	七	一	二	三	四	五	六	七	八																		
六五、三三四、三五一	六九、〇一九、八六四	七八、二八六、三八六	八三、〇一九、七〇九	八八、七三一、四〇七	九五、〇六五、八四八	九五、〇五三、〇〇〇	九四、八三六、〇〇〇	一〇一、四四二、〇〇〇	一二三、三三三、〇〇〇	一七一、二八六、〇〇〇	五、二一四、五四五	四、五三七、七四〇	五、〇五四、三二七	五、〇三二、七九六	五、五四七、八〇二	七、六〇〇、六二五	五、八六〇、〇〇〇	五、一九三、〇〇〇	六、四八〇、〇〇〇	一、五五三、〇〇〇	二、六九四〇、〇〇〇	七〇、五四八、八九六	七三、五五七、六〇四	八三、三四〇、七〇三	八八、〇四二、五〇五	九四、二七九、二〇九	一〇二、六六六、四七三	一〇〇、九一三、〇〇〇	一〇〇、〇二九、〇〇〇	一〇八、七三二、〇〇〇	一三八、七六四、〇〇〇	一九八、二六〇、〇〇〇

四〇八

大正三年に於ける内地人及土人の一箇年の漁獲高

(農商務省水産局調査に據る)

内地沿岸漁業	九五、〇五三、八一八	關東州出漁	二四七、七四六
遠洋漁業	五、八六〇、〇八七	臺灣出漁	約二五〇、〇〇〇
朝鮮出漁	四、六三一、一五〇	沿岸州出漁	七、二四五、三三六
樺太出漁	七、一七三、九三六	合計	一二〇、四六二、〇七三

土人

臺灣人	一、四六二、六五六	關東州人	三七六、四六六
朝鮮人	五、五八六、四〇〇	合計	七、四二五、五二二

(前掲同書)

第四節 養殖業

(1) 養殖業の状況

往昔人口少く智力發達せざりし時代にありては唯内地沿岸及河川湖沼に棲息する生物のみを不備なる漁具及漁船によりて採取し自己の食用に供したり而して當時其の漁獲高頗る僅少にして隨て需要も少なきに反し魚介類の繁殖力絶大にして水産物富裕を極め無盡藏の觀ありしも人口漸く増加を來し人智次第に發達するに及び漁船漁具は改良せられ漁法は精巧となり且交通機關の發達に従ひて需要供給愈々増大し遂に濫獲の弊に陥るに至り漁獲高は繁殖力に比例せずして嘗て富裕を極めし水産業も漸

四〇九

く不漁を嘆ずる状態となれるのみならず工業の發達に伴ひ工場製造場の新設鑛山の發掘等により有害なる排水を以て河水を汚濁し漁場を荒廢せしむる結果魚介類の棲息を不能ならしめ或は水力電氣事業の爲堤防を建設し河川を遮斷し又は堰堤を設くるが爲に河川を遡上して成育し産卵する鮎鰻鮭鱒等の如き魚類の通路を阻止して重要水族の繁殖に障害を與ふる等人爲的に繁殖力を漸衰せしむるに至れり斯くては魚族を減少せしめ有用水族の根絶を見るやも計られず延て水産業の衰退を見るべきを恐れ明治十四年政府は未生長魚介藻採捕禁止の訓令を發布し産卵期産卵場を保護し又採捕の限度を定め漁民をして之を遵守勵行せしむる等大に魚類の繁殖に留意する所ありたり

其の他工場より排出する有害水質の沈澱池を設けしめ或は瀘過し若くは化學作用に依り其の害を除去し堰堤には魚梯を架設し或は法律によりて禁漁期禁漁場を制定し漁具漁法を制限し更

に人工孵化事業によりて稚魚の放流をなす等専ら魚介の繁殖に努めたる結果今日盛に河海湖沼に漁するも水族亦猶盡きず斯業愈々盛大を呈しつつあり尙ほ琵琶湖霞ヶ浦等の大湖に於ける魚族の蕃殖保護に力を致すに於ては漁獲一層増加すべきを疑はず元來本邦は湖沼池澤に富めるに拘らず從來此等水面を徒に放置し荒廢に委して顧みざりしが人口増加し需要増進するに伴ひて近來此等池沼を開拓利用するもの多く養殖業の發達愈々緒に就きたれば聽て一大富源を開くに至るべし

(ロ) 養殖方法の種類

本邦の養殖には池中養殖と淺海養殖の二種あり前者は鱒鰻鯉等の淡水棲息魚を養殖するものにして東京静岡に最も盛なり後者は鹹水中に棲息する水産生物の養殖にして海藻介類を養殖するものなれど其の範圍頗る廣し

(ハ) 眞珠養殖事業

養殖事業中其の最も盛にして世界に喧傳せらるるものは御木本氏の眞珠養殖事業なりとす。同氏は明治二十三年志摩國辨天浦に事業を起してより専心養殖の研究を進め漸次基礎を固むるに至れり其の間毎度赤潮の襲來に遭ひて眞珠貝死滅し事業屢々頓挫せし事ありしが遂に明治四十一年世界に比類なき全圓眞珠養殖法を發明するに至れり今や氏の事業は益發展し眞珠の年産額は參拾萬圓の巨額に達し之に技工を施せし後内地は勿論遠く海外に供給す本邦の眞珠産額の殆ど七八割は伊勢灣に於ける同氏の養殖場に産出するものなり其の他徳島長崎兩縣にも同事業を經營するものありて年産額拾萬圓餘に達す然れども歐洲戰爭勃發以來歐洲に於ける眞珠の需要減少し多大の打撃を被ふれり殊に木曜島に於ては採貝船は出獵を中止し且つ其の販路閉塞せられ本邦人にして業務を失ひ退去するものあるに至れり

(二) 歐洲大戰後の本邦養殖業

戦後歐米各國は種々改善を加へ斯業の發達を謀るに至りたるを以て本邦も亦國庫の補助により大規模の水産業を奨勵し牡蠣其の他魚介の養殖を奨勵し近來多摩川に鮎鱒の養殖を始め或は東京灣の淺海利用を講ずる等積極的努力を續け居れり尙ほ各地に養殖會社の設立せらるるもの多く瀬戸内海の淺海琵琶湖濱名湖霞ヶ浦等の湖沼を利用し魚介類の養殖に従事するもの増加し事業大に振興せり今農商務省水産統計年鑑に依り明治三十六年以降本邦養殖業の狀態を見るに養殖場面積及收穫高に於て年々増加しつつあり殊に大正七年には養殖場面積に於て前年より減少を示せるも其の收穫高却て激増を見たるは近來養殖方法の進歩を語るものなり蓋し斯業の發展は本邦漁業家の努力によるものなりと雖も地勢の頗る有利なること亦大なる原因なるべし

養殖業累年表

年次	養殖場面積	收穫價格	年次	養殖場面積	收穫價格
明治三六	九三〇、二八三、九六	一、三六六、四九七	明治四一	一、三六九、〇七五、六八	三、六七六、九二
同 三七	四六、三八六、八八四	一、七五四、九九二	同 四二	一、二〇〇、八一、九〇七	四、一〇六、九八六
同 三八	四八、九五〇、九六九	二、四三〇、一四五	同 四三	一、四七〇、〇六、九八六	四、一五〇、七八六
同 三九	七七、二六九、一三三	二、八〇五、五九〇	同 四四	一、四二八、八四、〇〇〇	四、〇八七、〇〇〇
同 四〇	八一、七六六、〇九六	二、八三三、二六三	同 四五	一、六八〇、一六、〇〇〇	四、九五五、〇〇〇
同 四一	九一、四一八、四七七	二、八七三、一七七	同 四六	一、七三三、五三、〇〇〇	五、二八三、〇〇〇
同 四二	一〇六、三二四、八〇六	三、〇二七、四三〇	同 四七	一、八五八、五二、〇〇〇	六、三三八、〇〇〇
同 四三	一〇七、六六四、六三六	三、八〇八、〇二八	同 四八	一、七八四、三三、〇〇〇	八、二六二、〇〇〇

(農商務省水産年鑑に據る)

第五節 漁獲物製造業

(1) 製造業の起原及情況

本邦に於て始めて水産製造品を出せし時代は詳かならざるも明治二年開拓使設置の頃各地に工場を官設し製油罐詰等の事業を開始せし時を以て其の初期と見るべし然れども當時に於ける

製品は數量種類共に微々たるものにして其の統計も詳かならず唯鯨油の輸出僅々九千圓ありしに過ぎず明治十七年には約一萬圓の水産品輸出をなせるあり爾來著々斯業の發展を企圖し米國より製造機械を輸入し専ら水産物製造の新案及改良に關する研究を始めたり從來罐詰事業の如き鮭鱈の二種に限られ鯨の如きは其の漁獲高の八割は肥料用に供せられ僅に他の二割を市場に出すに過ぎざりしも水産試験所の開設以來鯨其の他魚介類の製法を研究し殊に北歐諾威式製法を參酌して鹽藏鯨燻製鯨及罐詰の新製法を始め需要多く鹽藏鯨は海外に輸出するに至れり其の他肝油の製法魚粕乾燥法鮭鱈罐詰法魚肥分析等を行ひ當業者を指導獎勵したれば事業頓に振興せり日清日露の兩戦役に當り陸軍省は民間罐詰製造品を購入して軍用品に充當せしを以て農商務省は地方の罐詰事業を督勵し之が供給を爲さしめ大に罐詰製造の發達を促進せしめたり爾來魚介類の製造法漸次改良せられ

精巧なる魚槽壓搾器を發明するに至り製造會社の創立せらるるもの多く隨て製造高も増加せり又斯業の發展は勢ひ冷蔵事業の勃興を助長して進歩せる冷蔵法を案出し相續で更に本業の發達に資益せり斯の如く官民呼應して努力せる結果當業者も漸次自覺し北海道千島樺太に蟹罐詰を創製して之を北米に輸出し次で露領沿海州に於ける鮭罐詰業の開始せらる等輸出食品其の他の罐詰業著しく勃興し大正四年遂に硬化魚油製造を完成し近時盛に之が製造に著手するに至れり製品の改良新製品の試製等に努力せる結果其の産額亦年々増加し斯業の前途は益有望となるに至れり輓近製造品の主なるものは鯨類に於ては鯨鹽藏燻製其の他鹽鮭鹽鱈棒鱈開鱈鹽鱈乾海鼠乾鮑錫昆布製品等魚油に於ては鯨鯨鱈鯨鮫鯨等とす最近内地に於ける水産製造高は大正七年には一億千二百萬圓にして之を大正三年の五千二百萬圓に比すれば實に六千有餘萬圓の増加を示せり今製造品種類別及其の製造

額を見れば左の如し

大正二年以降同七年に至る重要製造物累年比較表

種類	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
節類	八、五四一	八、七〇一	九、七三五	九、〇九一	一四、六七七	一八、〇七九
素類	八、六〇四	八、〇一六	五、九〇九	一一、〇八五	一〇、二五八	一一、八八四
鹽類	二、七二六	一、六六五	二、四四九	一一、七七六	四、三三一	五、八六九
乾類	八、七六一	八、二二二	八、〇七四	九、二八八	一一、一九四	一八、三八一
燻製	一一三	一四一	一七四	一〇六	二一九	二九九
鹽類	四、三五九	三、八九二	六、八三五	四、八四四	一一、一八九	一四、六二五
魚類	三六、六九四	三六、八三三	四二、四八〇	四九、〇〇三	六五、二二七	八七、二〇三
食用	一三、八〇二	一四、〇四六	一一、一六〇	一三、二六一	一六、六八九	二〇、九〇四
水産	九、九七	一、〇〇二	八二九	一、三八〇	一、七九一	三、一一三
魚油	五、七二六	五、一七四	五四、八〇九	六三、九九九	八四、五四三	一一、二六三
製造總額						

(農商務省水産年鑑)

(口) 貿易狀況

更に水産物の貿易状態に就て觀るに明治三十六年輸出に於て九百七拾四萬圓なるに反し輸入額は僅に四百四拾餘萬圓を算す

るに過ぎず本邦水産貿易は夙に輸出超過の状態に在りて他業に比し頗る優越の地位を占めたるを見るべし殊に日露戦争の結果軍需品として雑詰の需要を促してより頓に此の種事業勃興を促し支那南洋方面へ輸出せると同時に歐米殊に米國に於ける水産製造業の繁盛に對し原料品たる鯧魚等の輸出漸次増大せり即ち大正元年の輸出は壹千九百餘萬圓に達し九箇年間に約壹千萬圓の増加を示せり同時に輸入は逐次減少し大正元年には僅に貳百貳拾萬圓に過ぎず之を九年前の明治三十六年に比すれば正に半額にして輸出の超過は逐年其の額を増大しつつあり此の外特別輸入と稱するものありて本邦出漁船の朝鮮及露領アジアに於て採捕し無税にて輸入せるものなるが寧ろ本邦水産生産額と看做すべきものなり明治三十六年以降歐洲戰前頃に至る輸出入價額表左の如し

貨物輸出入總價額及水産物輸出入價格
累年比較表

年次	總輸出價額	内水産物價額	總輸入價額	内水産物價額	輸出總價額に對する水産物價額割合	輸入總價額に對する水産物價額割合	輸出水産物價額に對する輸入水産物價額割合
明治三六	二八九、五〇二、四四三	九、七四二、九八五	三一七、一三五、五一八	四、四三六、八〇〇	〇・〇三四	〇・〇一四	〇・四五六
同 三七	三一九、二六〇、八九六	九、八〇二、六〇二	三七一、三六〇、七三八	一、一八九、四一三	〇・〇三一	〇・〇〇三	〇・一三一
同 三八	三二一、五三三、六一〇	一〇、四八三、一六八	四八八、五三八、〇一七	一、八二〇、三九九	〇・〇三三	〇・〇〇四	〇・一七三
同 三九	四二二、七五四、八九二	一一、〇八〇、五二九	四一八、七八四、一〇八	三、三二七、五三二	〇・〇二九	〇・〇〇八	〇・一七五
同 四〇	四三三、四二二、八七三	一三、七三九、〇七六	四九四、四六七、三四六	七、一五四、〇四〇	〇・〇三二	〇・〇一四	〇・五二二
同 四一	三七八、二四五、六七二	一一、五七八、一八二	四三六、二五七、四六二	八、四九四、三六一	〇・〇三一	〇・〇一九	〇・七三四
同 四二	四一三、一一二、五一二	一二、七九二、六〇四	三九四、一九八、八四五	八、五七八、五八七	〇・〇三一	〇・〇二二	〇・六七二
同 四三	四五八、四二八、九九六	一五、三五五、四九五	四六四、二三三、八〇八	六、六六四、五八七	〇・〇三三	〇・〇一八	〇・五五二
同 四四	四四七、四三三、八八八	一五、二八二、五五五	五一三、八〇五、七〇五	八、四八三、三八三	〇・〇三四	〇・〇二二	〇・五五二
大正元	五二六、九八一、八四二	一九、二四九、九〇八	六一八、九九二、二七七	一〇、四一七、〇一九	〇・〇三七	〇・〇一七	〇・五四一

第六節 歐洲戰亂の影響

歐洲戰亂が本邦水産業の開發上與へたる好影響洵に少なから

(農商務省水産年鑑)

す即ち本邦水産物の輸出は歐洲大戰の爲に南洋及支那方面に新販路を開き就中輸出の増加せるものは罐詰寒天及貝釦等にして一般食用品の大部と魚油とは價格に於て増加したるも數量は却て減少を示せり之に反して珊瑚は伊國參戰の影響を受けて輸出著しく減少せり大正七年に於ける水産物輸出總額は四千二百八十一萬餘圓にして前年に比し二割八分を増加し更に戰前の大正三年に比し約九割を増加せり殊に魚油は罐詰と共に大戰の影響により増加せるもの最たるものなり從來本邦魚油は鯨鯨の諸油大部分を占め製造高の八割迄は英獨兩國に輸出せられたりしが戰爭に依り獨逸への輸出杜絶し且つ歐行船腹の缺乏に伴ひ運賃暴騰し多少の打撃を受けたれども英米兩國の需要増加せる爲に却て増加し大正七年輸出額は四百八拾九萬圓にして前年より百萬圓の増加なり而して近時内地脂肪工業の發達に伴ひ牛蠟の代用たる硬化油を魚油より製造し得るに至り益新に用途を開拓

し英國及米國を主とし濠洲佛國等に輸出せらる罐詰業も戰亂の結果唯一の軍需品として異常の需要を惹起し戰時露國より莫大の注文を受け斯業活躍の動機を與へたり大正七年總輸出高は七百六十一萬圓にして前年に比し二割八分大正三年に比し實に十七割の増加なり元來本品は長期保存に堪ふる食料品なるに依り軍需品として盛に内外の需要を喚起したるが英國の三百四十餘萬圓を最とし米國の二百二十餘萬圓之に次ぐ其の他寒天食用水産物貝殼等も亦大戰の結果需要激増し逐年生産を増加せり更に輸入方面を見るに既記の如く輸入は輸出に比して頗る少く年々輸出超過の状態に在り殊に歐洲大戰は輸出入の差を甚大ならしめたり大正七年輸入總額は千十一萬圓にして輸入品の重なるものは食鹽貝殼鹽鮭及鼈甲類とし主として支那關東州米國新嘉坡及濠洲等より輸入するものなるが其の内食鹽の六百萬圓を首位とし貝殼の二百八十萬圓之に次げり大正二年以降主要水産物輸

出入状態を示せば左の如し

主要水産物輸出入累年比較表

年次	輸出總額	輸入總額	特別輸入水産物
大正	二四、四二七	二、七一七	九、八六四
同 二	二二、四九二	二、一三四	一一、一五八
同 三	二二、三一五	二、四四二	一一、〇一四
同 四	三〇、四八三	三、三九二	一〇、七四六
同 五	三三、四一一	四、六六一	一五、九九五
同 六	四二、八一四	一〇、一一二	二八、二八四
同 七			

(備考)

特別輸入水産物とは出漁船の漁獲採集に依り無税輸入したるものなり

(農商務省水産年鑑)

第七節 結論

戦後に於ける本邦水産貿易は前途頗る有望の機運に在り、戦前に於ける輸出水産物の主なるものは罐詰魚油等にして、英國米國南洋に輸出せられ、尙ほ今後鱈、鯖、鮪の新販路を海外に擴張する餘地あり、要するに最近本邦水産業は漁撈、養殖及製造の各業、何れも

顯著なる發達を爲しつつあるに加へて、近來臺灣、朝鮮及樺太の新領地に於ける水産業亦目醒しき發達を遂げつつあり

第八節 製鹽業

(イ) 製鹽業の發達

由來本邦製鹽業は降雨多く海水含鹽分少きのみならず、土壤斯業に適せざる等種々の關係によりて大なる發達を見ず、唯内地に於ては中國四國の瀬戸内海沿岸地方及臺灣、朝鮮、關東州等に發達を示せるのみにして、年々供給に不足を生じ、外國輸入に俟つの状態に在り、但し近時優秀なる製鹽法及新領地製鹽業の發達により年産額著しく増大せり

本邦製鹽業は明和八年三田尻の人田中藤六、限月製鹽の必要を唱へ、三月より八月迄を製鹽期とする三八法を創めしを以て、其の初期なりとせらる、爾來漸次隆盛に赴き、明治十八年農商務省令を以て鹽田を組織し三八法を行ひたるも、二十一年之を廢止せり、次

で明治二十八年臺灣の我領土に歸するや從來の鹽專賣を廢止せしも間もなく再び鹽專賣法を行へり斯くて各種企業熱勃興するに伴ひ外國貿易頻繁となり當局は官吏を歐米に派遣して鹽業調査をなさしめ明治三十二年始めてカナハ式製鹽法を廣島縣下に試行せり日露戰役に際し鹽の需要増大せる爲鹽消費稅案及專賣法案を研究し三十八年鹽專賣法を實施せり次で歐米より天日製鹽法を習得し朝鮮に於て之を實施し爾來逐年鹽の需要を喚起したれば從來の不利益なる鹽田事業を廢止し明治四十三年鹽田整理法を實施し大に收益を増進せしめたり

鹽は日用必需品にして生活上缺くべからざるものなれば之が生産價格を一致せしむるの要あり且つ政府收入として適好のものなることは是れ政府の專賣に歸せる理由にして爾來大藏省專賣局にて之を管理し年々約十億斤以上を内地用に充當しつつあり

(ロ) 製鹽方法の種類

鹽の産出を大別して岩鹽井泉鹽及海水鹽の三種とすと雖も本邦産には海水製鹽を主とし他は殆ど稀なり又現行はれつつある製鹽法は内地に於ては海水製鹽法即ち天日又は風力により海水を濃厚ならしめ地中に食鹽を結晶せしむるにあり臺灣及關東州に於ては現今歐米に行はるる天日製鹽法を用ふ

(ハ) 貿易狀況

本邦事業界の勃興人口の増加に伴ひ鹽の消費高は年々増進し明治三十八年鹽專賣法を實施して調節を圖りしと雖も從來の如く内地鹽のみにては到底需要を充すに足らず主として歐米鹽の輸入によりて纔に不足を補ひたるに過ぎず然るに臺灣及關東州に完備せる製鹽法の實施せられて以來種々改良の結果其の製鹽業頗る發達し産額亦年々増加し陸續内地に輸送せらるるに至れり從て最早歐米よりの供給に俟つ必要を見ざるに至れり然れども時局以來一般經濟界の發達に伴ひ鹽藏用及漬物用等に鹽の需

要増加し其の消費量増加したるを以て再び歐米より多少の輸入
 を見るに至れり更に大正六年に至り青島鹽及朝鮮鹽の移入加は
 り内地の需要を充足するに至れり鹽の輸入高左表の如し

鹽輸入高表

年次	英國	米國	獨逸	關東州	青島	臺灣	朝鮮	合計
大正一	二七	二	一	三五七五六		五二、二〇二		八七、九六六
同二	二二			六四、〇〇七		六〇、六九五		一二四、七二五
同三	三三			八一、九九六		九三、六九九		一七五、七二六
同四	二	四〇		五九、二九三		九〇、五六九		一四九、九〇四
同五	一八	一二三		八二、三八〇		一〇六、二三八		一八八、七四九
同六	一三	一八〇三		一七〇、三三九	六一、六六七	一四八、二九二	五、四七七	三八七、四八一
七年七月迄	三	三〇六		五六七二〇	四四、五六二	六八、〇〇三		一六九、五九四

(專賣局年報に據る)

輸出高は内地に於ける鹽消費高の増加せる爲に年々減少しつ
 つありしが大正六年は臺灣及關東州の製鹽好況なりし爲に一時
 其の輸出高に激増を致せり而も鹽の需要も衰へざるに拘はらず
 過度の輸出を爲したるを以て大正七年には天候不良による内地

製鹽額減少の爲に遂に供給の不足を來したり是に於て關東州及
 青島其の他外國より多額を輸入し其の不足を補充するに至れり
 今鹽輸出の状況を見るに左の如し

製鹽輸出高累年表

年次	内地輸出高	殖民地輸出高	合計
大正一	一〇〇、〇三四	二八、九八七	一二九、〇二一
同二	五八、二二一	五五、五六五	一一三、七八六
同三	四七、五一八	二三、三六五	七〇、八八三
同四	八一、八二六	二七、一五七	一〇八、九八三
同五	八六、五三四	二五、四八四	一一二、〇一八
同六	一一三、九四二	五六、四二七	一七〇、三六九
同七年七月迄	一〇〇、四七一	二〇、八〇二	一二一、二七三

(專賣局年報)

(二) 結論

以上の諸説明を綜合すれば内地鹽の生産高を以てしては本邦
 の國情天然的に製鹽に適せざると人口及經濟界の膨脹に依る需

要の増大とに追はれ將來自給自足の域に達すること殆ど望み難く尙ほ外國より輸入を仰がざるべからざるなり

日本事業小史(終)

大正十二年五月十二日印刷
大正十二年五月十五日發行

(非賣品)

著作兼發行者

三橋隆一

東京市麴町區錢瓶町一番地
日本興業銀行調查部内

印刷者

小林武之助

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地

507
110

終